カリカリカリ……。
社内に響き渡った、今となってはもう聞こえる筈のない音に身体が硬直した。
傍らに立つ少年と咄嗟に視線を交し合う。
常であれば感情の起伏を見せることなど早々無い少年が、傍から見ても分かるほどに緊張した表情を浮かべているのを目にし、これはまた随分と珍しいものを見たなと場違いな感想が脳裏の隅を過ぎった。しかしそんな少年の目に映っている自身の顔もまた、少年と似たり寄ったりの顔つきをしていた。なんてことだ。少年よりも遥かに人生経験で勝る筈のこの自分が何てざまだ。他人のことを言えないじゃないか。そう思うと妙に可笑しくなってしまった。
全く以って莫迦莫迦しいだろう。いい年をした大の大人である自分と数々の死線を掻い潜って来た少年が、たかが獣の立てる爪の音一つに、かつて無いほど緊張しているのだ。だが、如何に莫迦にされようとも、自分と少年にとってはこの音はかけがえの無い存在を思い起こさせるものだった。笑いたければ笑うがいいのだ。自分たちにとってはそんなもの、屁でもない。
小さく頷き合い、そろりそろりと足を忍ばせながら少年が扉へと向かう。取っ手をゆっくりと回す白い手を、自分はデスクの前から固唾を呑んで見守る。ギィ、と軋んだ音を立てて開いた扉のほんの僅かな隙間から、黒く小さな生き物がするりとその身を滑らせた。まさか。
はっと同時に息を呑み、愕然としている自分たちを尻目に、あの事件の際に失われ、再び自分たちの元へ戻る筈のないものだとばかり思っていたあの黒猫が、長い尾をぴんと立て、すたすたと、かつ

てありし姿のままの我が物顔で社内を歩き、ひらりとソファーに飛び乗った。
逸早く我に返った少年が己が目付けの黒猫の許へ駆けたことで自らもまた、我に返った。
「ゴウト、どうし……」
「ゴウト、」
猫の傍らへ片膝を立てて座り、話しかけようとしていた少年を突き飛ばす。
思わぬところから喰らわされた突然の攻撃に、油断しきっていた少年は堪らず身を崩した。だがそんなことは構っちゃいられない。つい今し方少年から奪った黒猫の真正面という位置に膝をついた。
何故、彼が。彼はあの一件の折衛星タイイツを打ち落とす為宇宙で。
混乱する頭を抱えながらおそるおそる手を伸ばすと、彼は呆れた風に崩れた少年の姿を見遣っていた目を戻し、にゃあと一声鳴いた後其の長く赤い舌で自分の指先を一舐めした。
失われた筈の其のざらりとした感覚に心を鷲掴みにされる。衝動の赴くままに彼を掻き抱く。突然の容赦ない抱擁に黒猫は暫くの間窮屈そうに暴れていたが、自分が手を緩める気が無いと悟ると諦めたのか。やれやれと言った風に身体の力を抜き、自分の好きなようにさせてくれた。嗚呼。
嗚呼、……正しく、彼だ。

歴とした情人である筈の自分を、かつての頃ですら加えられたことが無い程の情け容赦ない力で突き飛ばし、もう二度と離さぬとでも示すかのように黒く小さな身体をしっかと抱き締め、頬を寄せる

彼の人と。
表面上は鬱陶しそうにしていながらも、あながち満更でもない顔をして彼の人を宥める憎たらしい己が目付の其の姿。
床に崩れ落ちていた状態からゆっくりと起き上がりながら、久方振りの邂逅に感激した、つい先ほどの自分の健気さに涙が浮かびそうになった。
……今更なんだってこんな光景を目の当たりにしなければならないんだ。
思わず泣きが入りそうになった。
しかも片恋であった以前より、手酷い扱いを受けているような気もする。
不愉快さと理不尽さから憮然とした表情を浮かべながらも、実際には手も口も出せなかった。無意識の内でさえこのような扱いを受けているのだ。若し迂闊に行動して、面と向かって邪険にされたなら。……正直、落ち込むどころの話ではなくなるだろう。
止むを得ず、睦み合う両者の姿を少し離れた場所に移動してじっと見詰める。実に恨みがましい視線を送っていることに自分でも気付いていたが、こればっかりはどうしようもなかった。
何だよ何なんだよもしもしゴウトさん貴方迷惑そうに眉顰めている割には喉がさっきからゴロゴロゴロゴロ言ってるんですけどっていうか鳴海俺は貴方の情人ですよねそれなのになんて力で突き飛ばすんですか結構痛かったですよしかも倒れた俺には見向きもしないで無心にゴウトへ向かって手を伸ばしましたよねそして俺の目は見逃さなかった其の様子を見てゴウトが満足そうに笑ったことを嗚呼なんて人たちだしかも何ですかその仲睦まじい様子は……って、

ぐるぐると空回りする思考を抱えながら両者の姿を凝視していた其の時、彼がとある行動に出ようとしていることを察した。慌てて止めようとするも一歩遅く、彼は笑みを浮かべて思うがままに動いた。――動いてしまった。

「ゴウト～」

「あああっ、」

ちゅ、と外国人のように軽く音を立てて黒猫の口元へ唇を落とした彼の人の行為に悲鳴が漏れた。

「……ん、どしたライドウ、」

其の悲痛な響きに漸く自分の存在を思い出してくれたのか。

満面の笑顔で黒猫に擦り寄ったまま初めて目線をこちらへ向けてくれた彼の人に、自らの動揺をそのまま写し取ってふるふると震え続ける指で先ほどの音の発生源を指す。

「な、な、な、……一体、何を、」

すっかり動転しきっている自分の姿を目付はじぃと見遣った後、其の懐かしい翠の瞳をすっと目を細めた。

……こ、この野郎。

分かってて受け止めたやがったなと、挑戦的に笑んでいる其の翠の瞳を恨みを込めて睨みつけた。

師弟の間でそんな無言の遣り取りが交わされていることなど露ほども知らぬ男は、きょとんとした顔つきで自分の質問に答える。

「え、さっきのって、……キスのこと、」

「キ、……え、ええそうです何だってゴウトに、」
平然と其の言葉を口にした彼に、少々ひっくり返った無様な声で更に問う。
「何でって、……だって戻ってきてくれて嬉しかったから思わず、」
「だからって、キス、キスを……」
問題は其処ではなく、情人である自分以外の男に其の行為を為したことが自分にはひっかかるのだということを、彼は全く理解できていないらしい。
尚もごねる自分を暫しの間戸惑った風に見詰めていた彼は、やがて黒猫を更に腕の内に囲い込み、眉を寄せて鬱陶しそうに（そう、鬱陶しそうに、だ）問いかけてきた。
「あ～もう煩いなぁライドウちゃんは。お前、ゴウトが戻ってきてくれて嬉しくないの、」
「え、いや、それはもう嬉しいです、嬉しいですけれど、」
人をまるで極悪人を見詰めるかのような目つきで見始めた彼に慌てて両手を振って誤解を解けば、何だとばかりににっこり微笑まれた。
「ならいいじゃねェか。なぁ、ゴウト。……お前さん、厭だったか、」
この自分であっても滅多に見ることのかなわない彼の、心から嬉しそうな笑みを間近に向けられた黒猫は、其の大きな耳をぴくりと動かし、目を瞬かせた。
……ニャー（些かバタ臭い挨拶だと思わんことも無いが、別に構わん）。
そして口に出された憎たらしい答えに、思わず手が拳を作った。
黒猫の言葉は分からないまでも、拒否の響きが無いことだけは彼にも伝わったのか。こちらを見遣

った彼はほら見ろ、とばかりに得意げな表情を浮かべた。
「ゴウトも厭じゃないって言ってるぜ」
「何でゴウトの言葉が分かるのです、もしかしたら嫌がっているかも、」
往生際悪く抵抗してみせる自分の意見を、彼は即座に一蹴する。
「何言ってんだ、こいつが本気で嫌がろうものなら俺は情け容赦なく爪を立てられているだろうさ。ライドウ、お前だって経験がある筈だ、」
「そ、それは……、」
完全に言い包められ、ぐうの音も出ない。しかし堪えきれない感情から、先程作った握り拳がぶるぶると震えた。
ふと視線を感じた方向に目を遣ると、愉快そうな色を隠そうともせずに無様な様子の自分を見つめている黒猫の姿が目に入った。
器は違えど、以前と全く異なることのない其の気性と底意地の悪さに、憎らしいやら懐かしいやら嬉しいやらで浮かべるべき表情に困り果て、其の場に立ち尽くした。
そんな自分の姿を彼の腕の中からずっと見詰め続けていた黒猫は、複雑に絡まる自分の内情全てをお見通しなだろう。翠の双眸に愉快そうな光を湛えつつも、目線に常に潜ませている鋭さを今ばかりはと和らげ、自分へ向けて喉を鳴らした。
一方、自分の内情など想像もつかないのであろう彼の人はといえば、そのまま嬉しそうに黒猫の喉もとのふかふかの毛を撫でて、いたくご満悦であった。

――この様子では、ひとしきり満足するまで離そうとはしないだろう。
これまでの経験に加えて、今回は状況が状況だ。止むを得ないと自らを納得させ、早々に諦めることにした。
「……分かりました。つまらぬ事を口にして申し訳ございませんでした」
上機嫌で黒猫に擦り寄り続ける彼の人には、嘆息をつきながら詫びを入れる自分の科白など全く耳に入っていないであろうことは容易に知れたが、それでも示しをつけるために口にした。
――それに。
すっかり乱れてしまっていた学生服の裾を正し、埃を払う。
それに、かつての自分であればそのまま拗ねてキッチンへ逃げ込む所であるが、今は違う。
自信の根拠となる『ある事実』を胸に、平然とした面持ちを心がけながら目の前で繰り広げられる彼と黒猫の睦み合いを眺めた。
そんな自分を見て興が冷めたのか、黒猫はそれまでおとなしく為されるがままに身を委ねていた彼の人の腕の中で身を捻り、ひらりと中央の卓子の上に降り立った。其れと同時に前足で卓子をとん、と叩き、ニャアンと鳴く。
「んん、……喉でも渇いたのか、」
ニャアン。
彼の問い掛けにまるで普通の猫のように返答し催促する目付けの姿を、それでも矢張り忌々しいと思いながら睨みつける。

「へいへい、了解。……ちょっと待ってな」
機嫌の良い彼の人はいそいそとした足取りでキッチンへと消えて行った。

彼の後姿を見送っていると、其処で漸く目付けが自分へ向けて言葉を発してきた。
「……相も変わらずのようだな、ライドウ」
今際の際にかけられた呼びかけと同じ響きに胸を打たれた。嫉妬で荒れていた心が凪いでいく。
若しかしたら今生での再会は叶わぬやもしれないと案じたのは、今となっては遥か昔のことのように思うが、日数で数えてみればつい先日のことだ。こんなに早くによくぞ戻って来てくれたと、じんわりとした嬉しさが胸中に広がった。
しかし感動の再会なんてお互い柄じゃない。
潤みそうになった目頭をさり気無く押さえ、平素の状態を心がける。
無粋といわれようともこれが自分たちの立場であり、保つべき距離なのだ。こればっかりは譲るわけにはいかなかった。
「……ふん、笑いたければ笑うがいいさ」
さして特別な言葉を口にするわけでもなく素っ気無く返した自分の科白に、目付けもまた何時も通りの面持ちのまま、では遠慮無く、といった風に掠れた様な息を断続的に漏らし始めた。
――おい。

本当に笑うことは無いだろう、と自分から許可したにも拘らず不快になり、普通の猫には有り得ない其の挙動を憮然とした顔つきで眺めた。
まるで英国の物語に出てくる猫のような其の笑い方に不快感を煽られるが、しかし悲しいかな、そういった仕打ちに慣れて久しいのもまた事実だ。溜息一つで諸々の感情を押さえ込み、腕を組んで徐に口を開いた。
「……今までどうしていたんだ、」
身体を得て直ぐ様此処へやって来たにしては、随分と消耗しているようだが。
「野犬にでも追い掛けられたか」
所々埃を被った其の姿を目に留めながら、ふと疑問に思ったことを揶揄と共に問いかければ途端に目付けはぴたりと笑いを止め、ふい、と彼方へ目線を向けた。
「莫迦を言え。そのような不手際を為すと思うかこの俺が」
「では何故」
ふんと鼻先で一笑してのけた其の言葉に、よく言うよと肩を竦めるも口には出さずに止めた。そんな自分の内心を知ってか知らずか、目付けは目を逸らしたまま嘯いた。
「――何、良い器を捜すのに少々手間取ってな」
大山椒魚なんてものにまで宿っておきながら、器に良いも悪いもあるものか。
随分と勿体ぶった言い回しで回答を避ける目付けのへそまがり具合に呆れながら、別の形で其の疑問を口にした。

「漆黒の色を持つ器とは、早々手に入らないものなのか、」
「そういう訳ではない。……が、自らが気に入るものとなれば話は違ってくる」
「……そういうものか」
「そういうものさ」
業斗童子の器は如何様にして選ばれるのか。其の場に立ち会った経験の無い自分には全く見当がつかず首を傾げていると、黒猫はぺろぺろと毛繕いをしながらちらりとこちらへ目線を向け、すぅと目を細めた。
これは何かよからぬことを企んでいる時の顔だ。
厭というほど見覚えのある其の不穏な表情に思わず身構える。
「……まぁ、尤も、」
近場にあった烏に宿ったままでも良かったのだが。
緊張した自分の姿を面白そうに眺めながら、黒猫は続きを口にした。
「それではあやつがいたく落胆するだろうと思ってな、」
未だ全ての言葉を発したわけではないと知りつつも全身の神経が反応した。刺々しい不穏な気配を発していく自らを察しながらも、恐るるに足りずと思っているのか。目付けは一向に調子を変えずに続けた。
「……態々この器を捜してきてやったという訳さ」
随分と喜んでくれたようだ、全く苦労した甲斐があった。

「ゴウト、お前、」
「――冗談だ。烏の姿では人家に入り込むのは難儀だから猫にした。それだけの話さ」
あからさまに彼の人を意識した目付けの言葉に、思わず目尻をきりりと吊り上げて、ずずいと詰め寄る自分から、目付けはひらりと其の猫の身を躱しながら先程口にした自らの言葉をあっさりと翻した。
そのまま何事も無かったかのようにとてとてと歩を進める目付けの、一見するとただ愛らしいだけにしか見えない憎たらしい後姿を睨み続ける。すると彼は突然何かに思い至ったかのように足を止め、振り返った。
「――想いが成就した割には、随分と余裕のないことだな十四代目」
「な、何故それを、」
簡潔に述べられた目付けからの指摘に思わず動揺した。
再会して此の方、調子を狂わされっぱなしな自分の姿を黒猫は愉快そうに見遣りながら、簡単なことだと答えを返す。
「……あやつからお前の匂いがした」
科白の意味するところに思わず顔が赤らむ。
そういえば今朝は珍しくシャワーで洗い流すだけに止めていたようだった。
身体を繋げることは許してくれても、入浴、そして後の始末云々に関してとなると話は別であるらしく、彼はそういった際には決して自分を立ち入らせようとはしないのが常であった。

しかし昨夜は揃って興に乗ってしまい、結果朝方まで行為に耽ってしまったことによる疲労から注意力が散漫になっていたのか。珍しく僅かに開いていた浴室の扉に衝動を抑えきれず、一切の気配を消し、そうっと中を覗き込んだ其の先で。

……目にしてしまった薄いカーテン越しに写る彼の細い身体の陰影と、始末の真っ最中だったのか、シャワーの水音の合間を縫って微かに漏れ聞こえた彼の吐息が妙に扇情的だったことを思い出し、次第に全身が赤く染まっていくのが分かった。

「まだまだ未熟よなぁ、十四代目」

「う、うるさい」

弟子から思った通りの反応を引き出せて御機嫌に笑う目付けの姿を、首まで朱に染まった姿のまま揶揄うのもいい加減にしろと肩を怒らせた。

「ん、どうしたんだライドウ、首まで赤くなってるぞ」

「は、いえ、あ、あの、」

自分と目付けが交わした会話を全く存ぜぬまま、仄かな湯気の立つミルクの入った深皿を片手に戻って来た彼が、きょとんとした面持ちで問いかけてきた。当人を目の前にしたことで、脳裏に焼きついてしまった今朝方の光景がより鮮明に蘇る。

しかし覗いていたことを白状するわけにもいかず、はてさて何と説明したものかと考えるが、只でさえ語彙に乏しいのに加えてこうも動揺してしまっては、一向に言葉が出てこなかった。

再び掠れた音と共に肩を揺らす黒猫と、全身から脂汗をかきながらどうしたって顔の色が引かない

自分を彼は暫しの間不思議そうに見やっていたが、自分には混ざることが出来ない会話で例の如く揶揄われたんだなと見当をつけたのか。まぁいいさと軽く肩を竦めて深皿を黒猫の前に差し出した。
ぴちゃぴちゃと旨そうにミルクを舐める黒猫の姿を、傍近くの椅子に座りうっとりとした目つきで眺めている彼の姿に、かつてと同じように遣る瀬無い気分に襲われながらも、それでも幸せそうな表情を見せられては心温まらぬ筈もなく。
「……珈琲でもお淹れしましょうか、」
「ん、あ、ああ。……しまったすっかり忘れてた。すまん、頼むよ」
「いいえ。……どうぞごゆっくり」
目付けに供するミルクのことばかり考えて、すっかり自分のことがおざなりになってしまっている彼のためにキッチンへと向かった。
そうして二人分の豆を挽き、湯を沸かしながら思うことは唯ひとつ。
……全く、俺も大人になったものだ。
口元に笑みを浮かべながら、仕方が無い、今日のところは目付けに譲ってやるかと溜息をついた。

仄かに甘いミルクで喉を潤しながら、だらしなく緩んだ顔をして自分を見詰めている男に時折ちろりちろりと視線を送る。
大道寺家令嬢失踪事件に端を発した一件が漸く決着し、また揉めに揉めていた小僧と此の男の関係

も、その後ほどなくして収まるべきところに収まったようだから、左程急いで戻る必要も無いかと思い。宇宙から戻って直ぐに宿っていた烏の器のまま、社の様子を窘越しに眺めたり、或いはより良い器は無いものかと街中を彷徨っていた。つい先日になって漸く程よい黒猫の器を発見することができたまでは良かったものの、其処から探偵社のある筑土までは結構な距離があり。辿り着くまでに少々の手間と予定外の時間がかかってしまったのには正直参っていた。

空になった深皿から頭を上げ、白く濡れた口周りを長い舌で舐め取る。其の流れのまま毛繕いを始めると、男は器を脇に避け、頬杖をつきながら片方の手の甲でそっと自分の身体を撫でてきた。

……こやつも相変わらずのようだ。

自分が呆れた目を向けているのに気付いているのかいないのか。一向に離れる気配が無い。

そうまで猫を好いているなら、さっさと新しい仔猫でも探して飼えば良かったものを。

何故そうしなかったのかと内心首を捻りつつ、やれやれと腰を上げて歩み寄り、かつてのように男の膝で丸くなる。すると男は其れで漸く落ち着いたのか、はちきれんばかりに発散させていた喜色が次第に収まり其の気配もしっとりとした落ち着きを持ち始めた。

やれやれ、これで少しは静かになる。

疲れている自分の気配を察したか。男はそれまで存在を確かめるかのように執拗に触れ続けていた手つきを、穏やかな其れに変えた。労るかのような其の動きに喉が鳴る。

……ふむ、なかなかにいい塩梅だ。

たとえ小僧が何と言おうともこればっかりは譲れんなと、先程キッチンへと姿を消した弟子のことを考えた。
拗ねて八つ当たりすることしか出来なかった以前と比べて、随分と情緒面が伸びたようだ。
目付け役として喜ばしい限りの変化に、更に喉が鳴った。
まぁ、あれだ。
もぞもぞと髭を震わせる。
……流石に此の歳になると、『感動の再会』とやらは、どうにもこそばゆくって堪らんのでな。
そんな自分の思いの犠牲となった弟子の、つい先程の無様に崩れ落ちた姿や其の後の恨めしそうな顔つきを思い出し、ふふふと笑い髭が揺れた。
その後起き上がると同時にこちらへ向けてきた情け無いことこの上ない表情も、これまた輪をかけて可笑しかった。嗚呼、よいものを見させて頂いた。
うとうとと微睡み始めた自分を、更に心地良い眠りへと導こうとでもするかのように穏やかな男の手つきに、久し振りにうっとりと酔う。
こうしていると、猫の身体も悪くは無い。
良い夢が見れそうだ。そう思い、瞼を閉じた。

【了】